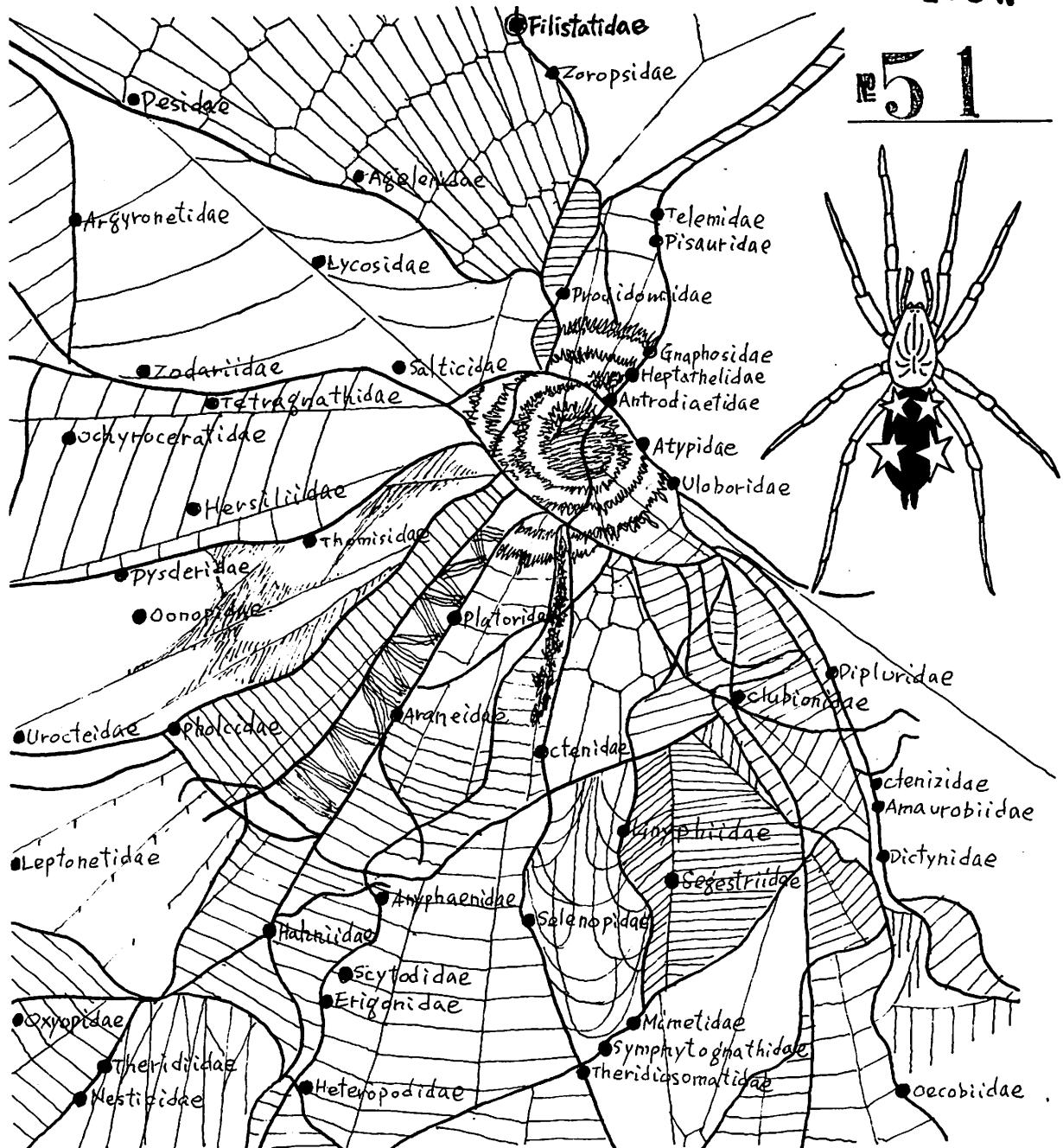


KISHIDAIA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

1984.

№51



KISHIDAI A

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No 51 March 1984年

————— 目 次 ————

ムラクモヒシガタグモの生態(3)

卵と卵のう、幼生と令の判定 ----- 池田博明 ----- 1

アシダカグモの長期飼育報告(IV) ----- 萩嶋 泉 ----- 7

新潟県十日町地方に伝わるジゴ(シグモ)の唱え歌と喧嘩民俗について

----- 新海 明・樋口 厚 ----- 13

東京蜘蛛談話会観察会報告 1981年春～1982年冬

天覧山のクモ ----- 鳴田順一・鈴木勝浩 ----- 15

東京蜘蛛談話会1983年度例会・総会での講演内容 ----- 23

表紙に寄せて ----- 小澤實樹 ----- 25

KISHIDAI A投稿規定 ----- 26

ムラクモヒシガタグモの生態(3)

卵と卵のう、幼生と令の判定

Ecology of *Episinus nubilus*(3):The Egg, The Cocoon and The Determination of The Instars

池田博明・生物研究部

(神奈川県立小田原城内高等学校)

V. 卵と卵のう The Egg and The Cocoon

1982年9月20日に神奈川県足柄下郡真鶴町岩地区で採集した成体メス3頭は、それぞれ小田原市の城内高校内のテラリウムで卵のうを作った。卵のうはいずれも白い球形で、直径は5mm前後である。これらムラクモヒシガタグモ*Episinus nubilus*の卵のうは、ヒシガタグモ*Episinus affinis*や、ヨーロッパの*Episinus truncatus*の卵のうとは異なり、糸が細いように思われた。卵のうの糸の幅を測定してみると、ヒシガタグモではどの部分でもほぼ一定しており19μm前後である。実際にはこれは1本が幅6μm程の糸が4本合わさったものである。これに対して、ムラクモヒシガタグモの卵のうの糸の幅は1本が2.8μm程である。ヒシガタグモの約半分である。しかも、これはヒシガタグモのように4本が合わさっているところもあれば、バラバラになっているところもあるといった具合で、一定していないことが解った。ヒシガタグモに比べてムラクモヒシガタグモの卵のうの外見の印象、やわらかそうな、ふわふわした感じは、糸自体の細さと、出糸突起から同時に放出された4本の糸が必ずしも1本にまとめられないことによるものである。

卵のう制作行動と卵のうの図は、東亜蜘蛛学会誌Atypus(82)に報じた。

卵のうは袋にはなっておらず、卵塊にくり返し糸がかけられていって出来る型のものである。

さて、テラリウム内で、ヒシガタグモが作った卵のうが1個、ムラクモヒシガタグモについて♀1が2個、♀2が1個、♀3が2個であった。このうちそれぞれの1個めの卵のうは9月28日の15時50分に発見したものである。テラリウム内の石の下に付けられていたので見えなかったのだ。9月21日以降に産卵したものであるが、産卵日は推測もつかない。計5個の卵のうの内、♀1の卵のう1個を9月29日に開けて、卵数や卵のうの構造を調べた。他の4個の卵のうの内、出のうしたのはヒシガタグモの1個だけであった。出のうしなかった卵のうは1983年1月24日に全部開いて調べた。

結果をまとめると次の如くである。なお、卵1個の直径は656μmであった。

♀ ♀1 first cocoon ; 61 eggs (卵のうの直径5mm)

second cocoon; 50 eggs (9月30日8時30分に卵のう制作を発見。それから約1時間かかって作りおえた。卵のうの直径5.4mm)

卵のうの外からうっすらとみえる卵塊の直径は 2.4 mm。
ただし卵は乾燥していた。)

♀ 2 cocoon; 18 eggs (卵のうの直径 5mm。卵は乾燥していた。)

♀ 3 first cocoon; 46 larvae (卵のうの直径 6.5mm。1令幼生が出のうせずに死んでいた。ふ化日は不明だが、10月14日に卵のう内が黒っぽくなつたと田村が記録している。この時、ヒシガタグモの卵のう内も黒っぽくなつていたことに気がついている。卵のう内にふ化しなかつた卵は発見できなかつた。)

second cocoon 53 eggs (卵のうの直径 5mm。9月30日16時28分に卵のう制作を発見。卵は乾燥していた。)

ちなみに、ヒシガタグモでは、卵のうを9月28日15時50分に発見、10月14日に黒っぽくなつたことに気がつき、10月23日(土)8時40分、鶴田が穴があいているようだと記録し、10月25日(月)16時に、2令幼生が33頭出のうしているのに気がついた。これらの幼生は網を張らず、従つて捕食もしなかつた。

まとめてみよう。ムラクモヒシガタグモは少くとも2個の卵のうを作る。1個めと2個めの間に交接は必要ではない。2個めの卵のうは卵数が減るのだろう。♀2の卵数が少ないので、この卵のうが♀2にとって、2個めか、それ以降の卵のうだからであろう。♀2はテラリウム内から、最も早く9月29日に見えなくなつてしまつた。死体を発見できなかつたが、弱つたか死んだものであろう。♀1や♀3は10月1日までは糸を出し活動したが、それ以後は、ガラス面や石の下でじつとしているだけであった。卵を産み終えて腹部はやせ細つてゐる。全く動かなくなつたので、死んだと思い、アルコールに入れたところ、♀1も♀3も生きていた(♀1は10月4日。♀3は10月19日。)

1983年には9月10日にムラクモヒシガタグモのメス3頭を採集してテラリウム内で飼育したが、卵のうを作らずに7日から10日ほどして、死んでしまつた。1982年の結果は幸運だったわけである。

ヒシガタグモでは、産卵から出のうまで3週間以上かかった。ムラクモヒシガタグモでも同様かもしれないが、結論は調査ができるからにしたい。

VI. 幼生と令の推定 The Determination of The Instars

生活史を明らかにしたいが、飼育が出来ていない。そこで、間接的ではあるが、採集個体の大きさを計測した。標本は1983年8月13日0時に岩地区の民家の垣根で採集した35頭(メス成体10頭、オス成体2頭、オス亜成体5頭、オス幼生1頭、その他幼生17頭)である。

1頭ずつ、それぞれの体長、背甲長、背甲幅、眼間幅(後列眼の最大幅。図1参照)を光学顕微鏡で接眼マイクロメーターを用いて計測した。倍率は眼間幅のみ60倍(15×4倍)で、他

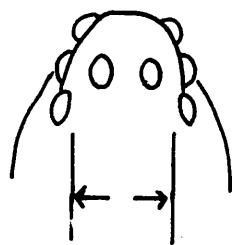


図 1 眼間幅
(Fig. 1.)

Fig. 1 The posterior eye row length
Fig. 2 Distribution of
(A) total length and carapace width
(B) carapace length and width
(C) posterior eye row length and carapace width

of each stages of *Episinus nubilus* in
Manadzuru 13-VII-1983: adult ♀(○), adult ♂(回),
nymph ♂(■), nymph(○)。

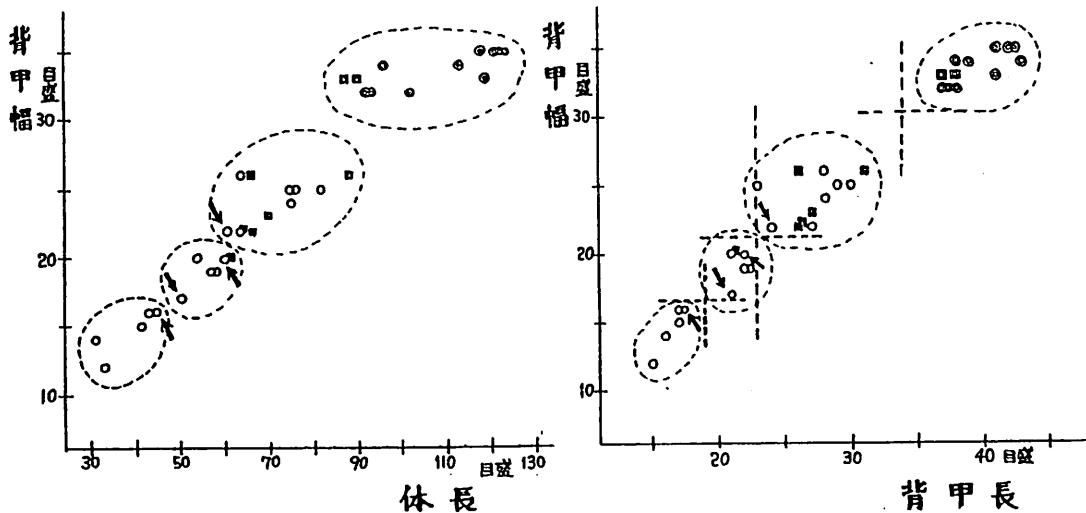
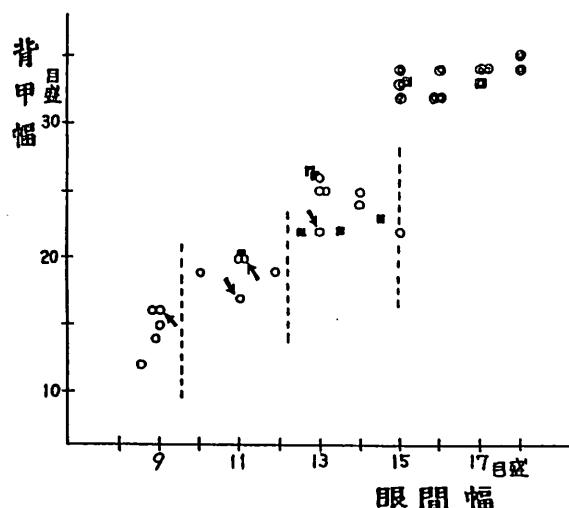


図 2. A 背甲幅と体長の相関

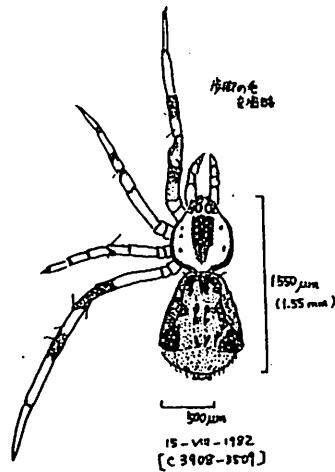
(Fig. 2) (メス成体○、オス成体回、オス亜成体と幼生■、その他の幼生○)

B. 背甲幅と背甲長の相関



C. 背甲幅と眼間幅の相関

図 3. ムラクモヒシガタグモの
(Fig. 3) Ⅲ令幼生 (The 3rd instar)



は28倍(7×4 倍)で行なった。

背甲幅と体長、背甲幅と背甲長の関係を図2のAとBに示した。図中の二重丸(○)はメス成体、二重角(□)はオス成体、黒角(■)はオス、白丸(○)はその他を表す。

背甲幅と体長、背甲幅と背甲長には、ゆるい相関がみられる。しかし、点が連続していくは、令を区分することができない。令を区分するには不連続な境界がなければならない(浜村、1971. 鈴木、1979)。背甲幅と背甲長の図2Bで、点は4つの集団に区分される。集団ごとに点線で囲み、境界線を縦の十字点線で示した。同じ点を背甲幅と体長の図2Aで囲んでみると、矢印(↓)で示した点が、どちらの集団に属するかが曖昧になる。これも、背甲幅と背甲長の方では、より明確に区分される。尚、グラフの縦横は接眼ミクロメーターの目盛数であり、 7×4 倍では、1目盛は $40\text{ }\mu\text{m}$ である。

秋田(1979)は、オオヤミイロカニグモ*Xysticus saganus* の令査定にあたって、背甲幅は脱皮後2~3日ぐらい伸長しており、安定までに数日を要するという欠点を指摘しており、眼間幅(後列眼間隔。最右眼から最左眼間の最大幅)がより適当であったと報じている。

そこで、背甲幅と眼間幅の相関をとってみたのが図2のCである。これも確かに境界の重なりのほとんどない区分ができる。ここで横軸の目盛数は、1目盛 $18.7\text{ }\mu\text{m}$ である。

しかし、背甲幅と背甲長でも点は同じ集団に区分されており、この8月13日の集団に限っては例外はない。眼間幅の測定は、光源が弱かったり、眼が歩脚で隠れたり、倍率が高くて焦点深度が浅かったりで、面倒な点が多い。今回の結果から推定する限り、背甲幅を基本にしてムラクモヒシガタグモの令査定をするのが実用的と思われる。

以上の結果をまとめ、以下の様に令を設定してみた。飼育での確認が出来るまでの仮りの令としておきたい。

I令：卵のう内でふ化した令。

II令：出のうしたばかりの令。造網せず捕食しないと推測している。

III令：造網し、小さな羽虫を捕食する。背甲幅 480 (7×4 倍で接眼12目盛)

から $640\text{ }\mu\text{m}$ (16目盛)。背甲長 600 (15目盛)から 680 (17目盛) μm 。
体長は $1800\text{ }\mu\text{m}$ 以下。眼間幅 $168\text{ }\mu\text{m}$ [15×4 倍で接眼9目盛]前後。

IV令：背甲幅 680 (17目盛)から $800\text{ }\mu\text{m}$ (20目盛)。背甲長 840 (21目盛)から $880\text{ }\mu\text{m}$ (22目盛)。眼間幅 187 [10目盛]から $224\text{ }\mu\text{m}$ [12目盛]。

V令：亜成体である。背甲幅 880 (22目盛)から $1040\text{ }\mu\text{m}$ (26目盛)。背甲長 920 (23目盛)から $1240\text{ }\mu\text{m}$ (31目盛)。眼間幅は 234 [12.5目盛]から $280\text{ }\mu\text{m}$ [15目盛]。体長は2.5から3.5mm。

VI令：成体である。背甲幅は $1280\text{ }\mu\text{m}$ (32目盛)以上。背甲長は $1440\text{ }\mu\text{m}$ (36目盛)以上。体長はオスは3.5mm程度。メスは3.7から5mm程度。

性別はIV令からはっきりする。オスは触肢の先がややふくらみ紡錘形となる。V令ではオスの触肢の先端は丸くふくれ、次第に黒ずんでくる。メスの外雌器部分の変化は顕著ではない。

VI令で成体になるということが、正しいかどうかは無論、明らかではない。また、ムラクモヒシガタグモの成体オスは、6月8日と、8月12日以降の採集標本中にあり、その化性も明確には断定できない。真鶴以外の地域で、このたび設定した尺度が有効かどうかについても、それを判断するだけの資料を持たない。数値が細かすぎると考える人もあるようが、測定誤差を免れないと私は考えているので、曖昧にするのは何の意味もないと思う。

Foelix (1982) に「小型のクモは数回（約5回）の脱皮を要する」という記述がある。出典は Bonnet (1930) だそうである。VI令までならば、脱皮回数は5回である。

成体では雌雄に体長の違いが大きいが、背甲の大きさはそれほど差がない。考えてみれば、これは当然のことかもしれない。触肢に生殖器を備えているのだから、あまり差があつては、メスの外雌器に合わせず不都合であろう。個体差が小さいのも、その辺に理由があるのだろう。

なお、ムラクモヒシガタグモの特徴は、Ⅲ令幼生から、はっきり出ており、図3にそれを示した。ただし、背甲や腹背の紋は、ヒシガタグモの幼生も似ている。ムラクモヒシガタグモの幼生は、ヒシガタグモの幼生と異なり、胸板や腹部腹面が黒っぽいのが特徴である。ヒシガタグモの幼生は、どちらも白い。これは成体でも同様である。ムラクモヒシガタグモとヒシガタグモの幼生は腹面で区別できるが、シモフリヒシガタグモ等、他のヒシガタグモ属との区別点は、標本も無く、明らかでない。

VII 補促と後記

頭初の予定では、生活史と *Episinus* 属についても書くはずだったが、調査、標本、文献ともに不足しており、数年後に稿を新たにするつもりである。本稿は今回で終了する。ムラクモヒシガタグモの生態 Ecology of *Episinus nubilus* という大層な標題を掲げてしまい、後悔している。

せいぜい、ムラクモヒシガタグモの習性 Habits of *Episinus nubilus* ぐらいにすべきであった。ともあれ、まだ未解決の問題は多い。今後も調査して少しでもクモの生きかたにふれることができれば幸いと思っている。

若干の補足をしておく。

(1) ムラクモヒシガタグモは、造網の際、どのようにして自分の位置を決めるのか。

網上のクモから地面までの距離は、ほぼ一定である。上糸を伸長する時に、その長さをどのようにして決めるのだろうか。この疑問に解答が与えられたので報告する。なんのことはない。いったん、地面まで下りてみるのであった。

1983年9月12日(月)24時、テラリウム内の成体メスは、上糸を張り、伸長した後、中央から糸を引いて下がってきた。ところが、クモの位置が高かった為、この下糸は大変に長くなってしまった。20cm以上あった。すると地面に着いた後、クモは下糸を切りながら上ってきて、もう一度、上糸を十分伸長しなおし、自分の位置を低めてから、下糸を下ろしたのであった。

Atypus(82) に報じた例(1982年8月17日。稻葉他の観察)のように、途中でやめ、

糸を流し直す場合もあるのだろう。しかし、いったん地面まで行ってみると、より一般的な方法ではないだろうか。

(2) 新海明氏より、Hillyard (1983) の論文をいただいた。英国でほぼ50年ぶりに採集され、初めて名も明らかになった *Episinus maculipes* の再記載である。体長はムラクモヒシガタグモ程度だが、若干色がうすく、逆Y字型の網を張る点では、ヒンガタグモに似ている。この論文でも上糸 (upper thread)と下糸 (lower thread)と表していたが、機能の点からいえば、Foelix (1982) が *Steatoda castanea* の図で記しているように、支持糸 (Supporting thread)と粘糸 (trap thread)とする方が適切と思われる。

最後に、池田ほか共同調査者の氏名を記しておく。Ⅰ、造網時刻と生態的地位（稻葉茂代・小川まゆみ・山口泉）。Ⅲ、網の補修（稻葉・小川・山口）。Ⅳ、日周活動（山口・小川・鶴田明子・島津千秋・田村武子）。V、卵と卵のう（稻葉・小川・山口・島津・鶴田・田村）。VI、幼生と令の判定（8月13日の採集協力～稻葉・山口・小川・鶴田・田村・露木瑞穂・中村利江・野際のぼる・佐藤伸一）。

参考文献

- 秋田米治、1979. オオヤミイロカニグモの令の判定。Acta arachnol., 28 (2):91-95.
Foelix, R. F., 1982. Biology of Spiders. Harvard Univ. Press.
浜村徹三、1971. キバラドクグモ *Pirata subpiraticus* の生態 I。Acta arachnol. 23:29-36.
Hillyard, P. D., 1983. *Episinus maculipes* Cavanna (Araneae, Theridiidae) : rediscovery in Britain. Bull. Br. arachrol. Soc. 6(2):88-92.
鈴木勝浩。1979. ウツキコモリグモの生活史を主とした生態研究。第22回日本学生科学賞選集：149-154. 聖文社。

関連文献

- 池田博明ほか、1982. ムラクモヒシガタグモの生態(1)網型と捕虫。kishidaiia, (49): 22-25.
同上、1983. ムラクモヒシガタグモの造網・交接・卵のう制作。Atypus, (82):28-34.
池田博明・生物研究部、1983. ムラクモヒシガタグモ観察日記。小田原城内高等学校図書館紀要, (6):65-74.
同上、1983. ムラクモヒシガタグモの生態(2) 造網時刻、生態的地位、補修、日周活動。kishidaiia, (50): 1-6.

アシダカグモ *Heteropoda venatoria* (Linne) の
長期飼育報告 (IV)

萱 嶋 泉

6年目(昭和49年5月1日～昭和50年4月30日)

今まで使用していた飼育箱の金網が、修理の出来ない程破損したので、今年度からアクリル製の人形ケースを飼育箱として使用することにした。このケースの寸法は横・縦20cm、高さ30cmである。5月1日にクロゴキブリ1匹を与えたが、5月6日まで捕食しなかった。5月6日午後7時にアシダカグモが、クロゴキブリを追いかける動きが見られたので、観察をつづけていると、68分後の午後8時8分にクロゴキブリを捕えた。そのままの姿勢で約4分間じいっとしていたが、クロゴキブリをその場に一端はなして置き、その周囲をゆっくりと回りはじめた。前にも述べたが、これはこのクモの本来の習性で獲物に糸をかける仕草であるが、アシダカグモではほんのおしるし程度にしか糸をかけない。その動作がすむと、またクロゴキブリを抱えこんで食べはじめた。その時刻は午後8時15分であった。

翌5月7日午前5時に観察するとまだ捕食中であったが、クロゴキブリはかみ碎かれてラグビーのボール状になっていた。それでつづいて観察をすると、午前6時40分にくわえていた球状の食べかすを、ぽとんと落した。食べはじめてから終るまで10時間と25分かかった。5月8日にクロゴキブリを1匹与えてみると、4日目の5月12日午前7時5分に捕えて食べはじめた。それを同日の午後5時25分に食べ終えた。所要時間は10時間と15分であった。そこで同日午後7時にクロゴキブリを1匹与えた。3日目の5月15日午後8時21分に捕え食べはじめ、翌朝7時18分に食べ終えた。所要時間は10時間と57分であった。このように6年目に入ると、餌を食べる時間が長くなった。しかしクモ自体は元気で、体を腰高にもちあげて、何にかを追い回す行動を盛んにするようになった。そこで昨年この雌と交尾をさせた雄を、5月17日に雌の飼育箱に隣り合せに置いた。クモは互にアクリルの壁越に、よく見えるので、意識し、求愛行動をはじめだした。5月19日になると求愛の仕草が盛んになり、換気のために開けてある針穴から互に歩脚の先端を出そうとするので、雄を雌の飼育箱に入れてやった。するといきなり雄が雌を抱えこみ、仰向にしてしまった。このようなことは今まで見たことがなかった。雌は無抵抗で雄のなすままになっていた。しかし心配なのは、雄の生殖球に精液が入っているか、どうかが判明していなかったことである。そこで雄の飼育箱を調べて見た。その結果、はっきりと2箇所に精網が張ってあったので、生殖球には精液が入っていると確信したのである。交尾動作は前回と同様だったので、記述は省略する。5月20日午前7時に雄をもとの飼育箱に戻した。雌は夜間になっても動かず、同じ所にじいっと下を向いていた。5月21日午前7時にクロゴキブリ1匹を与えたが、4日目の5月25日午後5時15分にやっと捕えて食べはじめた。それを5月26日午前1時48分に食べ終えて、塊状にした食べかすを口からはなした、所要時間は8時間と33分であった。この雌は餌を捕える場合、今まで狙えば、ぱっと1回で捕え

たのに、近頃では何回も失敗して、やっと捕えるようになった。また餌が意気よいよくぶつかってくると、逃げ腰になることもあった。それに今までは、大体において飼育箱の側面に8本の歩脚を四方に広げ、頭胸部を下にして静座するのが常であったが、今年度になって床や天井の裏にいることも見受けた。このことはクモの体力の衰えとも思えるけれども、多分に材質の違う飼育箱に変更した為めであるかも知れない。6月1日にクロゴキブリを与えるようと思って飼育箱をのぞくと、クモがしきりに箱の側面に糸をつけながら円形運動をしている。これは産座づくりの行動であるので、餌を与えるのをやめて、観察をつづけることにした。今までは飼育箱のガラスの面に産座をつくったが、今回はアクリルの面であるためか、産座をつくる時間が速く10分間でつくりあげた。産座づくりから産卵動作、卵のうのつくり方など皆昨年同様であった。飼育箱のアクリル面に円板状の卵のうが出来、それをゆっくりと、はがし触肢と第3歩脚で抱え込むまでに要した時間は1時間と40分であった。円板状の卵のうの直径は28mmで、厚さは5mmであった。この卵のうから子グモが出てきたのは、産卵後41日目の7月11日であった。子グモの数は286匹であった。7月13日午前8時に、飼育箱の内側の全面に広がって占座している子グモを2階のベランダに待っていって蓋を開けた。この日は曇りであって風は吹いていた。子グモは思い思いに糸を風に流して、すうっと飛んでいった。その間この母グモは飼育箱の床の隅に、じいっとしていた。

子グモが全部分散し、母グモだけ残っている飼育箱に蓋して、飼育室に持ち帰り、ただちにクロゴキブリを1匹与えた。それを7月15日午後4時50分に捕え食べはじめ、午後11時45分に食べ終えて、かすを床にぽとんと落した。これに要した時間は6時間と55分であった。すぐクロゴキブリを与えると7月18日午後10時20分に捕え食しはじめた。翌朝6時29分に食べかすを落した。食事に要した時間は8時間と9分であった。またすぐクロゴキブリを与えた、その餌を7月24日午後7時2分に食べはじめた。7月20日の午前0時に観察した時には、まだ捕食中であったが、2時に見回った時には、既に食べ終りボール状の食べかすを落した後であった。その為に正確な所要時間を知ることができなかった。けれども0時から2時の間であるので、ほぼ7時間ぐらい費したものと思う。この時の食べかすの状態が、今までと非常に違っていたので、ここに記述しておく。アシダカグモは普通餌を捕えると消化液を注入し、餌を咬み碎きながら消化されつつある液を吸うのである。それで餌の元形は全くなくなりボール状の塊りに食べかすをしててしまう。ところが今回は、クロゴキブリの翅も脚もそのまま、塊りからはみ出している。硬いものを咬み碎くことが出来ていないのである。だから食べこしの塊りも、何時ものように硬くなく、ふんわりしてやっと塊状を保っている状態であった。7月20日午後5時にクロゴキブリを1匹与えると、6日目の7月26日午後10時10分にこれを捕えて食べはじめた。翌朝7月27日午前7時に観察を行った時にまだくわえていたが、それから79分後の午前8時19分に食べかすの塊りを離した。やはり翅や脚はそのままであった。今回の食事の所要時間は、大変長く、10時間と9分かかったのである。7月27日午後5時にクロゴキブリを与えた。その餌を8月2日になても食べない、クロゴキブリも弱って飼育箱の隅にうずくまっている。その日午後10時頃、このクモが産座をつくりはじめた。動作はゆるやかであるが、丁寧につくりあげ、それにどろどろと卵を産みつけた。この卵塊は前回の半分ぐらいであった。いつものように時間をかけて、円板状の卵のうをつくった。今回産卵に要した時間は2時間余りで、前回より長くか

かった。卵のうの大きさは、直径20mmで厚さは4mmの小形であった。この母グモはこの円板状の卵のうを、触肢と第3歩脚で、しっかりと、22日目の8月24日まで抱きつづけたのである。勿論この期間は絶食を続けたのである。8月24日午後10時までに子グモは全部卵のうから出て、飼育箱の全面に脚を広げて静止した。この状態は20分前後続くので、動き出さぬ間にそれぞれの面を写真に撮り、各面をはり合せて後になって数えて見ると、今回卵のうから出た子グモは198匹で、前回よりは88匹少いことがわかった。8月26日になって、子グモの動きが盛んになってきたので、午前8時に今まで通りの方法で分散させた。今度の分散で新しい現象を見た。それはそれぞれが風に流した糸が、空中で絡み合って1本になりその糸に10匹余りの子グモが、数珠つなぎになって空高くひきあげられていったのである。これまでには、それぞれの子グモが、自分の流した糸にひっぱられて散っていったのに今回はじめて集団で、しかも意気よく飛んでいったのを見た。これは貴重な体験であった。

飼育箱を飼育室に戻し、母グモを観察することにした。非常に弱っているのでクロゴキブリの成体を与えるのをやめ、幼生を1匹与えてみた。すると午後7時になって捕食はじめた。これを5時間と18分かけて食べ、わりに硬い塊りにして落した。8月28日にクロゴキブリの成体を与えると、3日目の8月31日午後6時30分になって捕えた。これを12時間10分かけて食べ終った。即ち9月1日午前6時40分に食べかすを落したのである。9月1日午後6時にクロゴキブリ1匹を与えた。それを9月5日午前7時の定刻観察時に見にゆくと、捕えたばかりで、しばらくしてクロゴキブリを置き、糸かけの動作を形式的に行って7時8分に食べはじめた。食べ終ったのが9時間40分後の9月5日午後4時48分であった。この母グモは元気をとりもどし、夜間に盛んに動き回るので、はじめての試みとして、今年5月18日に交尾をさせた雄グモを、雌グモの飼育箱に入れて見ることにした。

その理由は、今年度から透明な飼育箱を使用して今日までに4箇月だった。その間クモ同志が何時も互に意識しつつ生活しているのを見て、このアシダカグモが、自然の状態で縄張りはあっても、多数のものが集って生息しているのに、このように1匹ずつ隔離して飼育してきたことが可愛想になったからである。9月5日午後10時に雄を雌の飼育箱に入れた。その瞬間は互に逃げ回って天井から落ちたり、側面を駆け上ったりした。しばらくすると飼育箱の離れた所に脚を広げ静座した。それから2時間経過した、9月6日午前0時になっても変化がないので、観察を中止して寝ることにした。ところが翌朝7時の定刻観察を行うと、驚いたことに、雄は体をばらばらにされて死んでいた。雌も左側の第1歩脚が転節の所から切断されていた。限られた飼育箱の中で、繁殖期でもない時に一緒に飼育させた不明を深く反省をしたのである。

この雌グモは10日目の9月16日になっても、与えたクロゴキブリを捕食しなかった。翌9月17日には与えた餌の方が死んだので、新しくクロゴキブリを1匹与えてやった。これを4日目の9月20日にやっと捕えたが、すぐに放してしまった。それで噴霧器でクモの体から水滴がたれる程、霧をかけてやった。それからしばらくの間は、7本の脚を交互に使って体長をぬぐい、いちいち口にもってゆき丁寧に体の水分を取り除いた。9月20日午後10時11分に先程捕えて放したクロゴキブリを再度捕えて食べはじめ、翌日の9月21日午前7時28分に食べ終りかすを落した。今回は9時間と

17分かけて食べたことになる。食べかすの塊りも、きっちと硬くしまっていなく、まだクロゴキブリの体液も十分に吸いとられていなかった。9月21日午後6時に与えたクロゴキブリは、5日目の9月26日午後8時30分に捕えて食べはじめた。この餌を9月27日午後7時2分までかかって食べた。食事に要した時間は10時間と32分であった。この雌は昨年のこの時期に比較すると、非常に食欲が減じていることがわかるのである。そのために体力が減少したのか、飼育箱内の静座する姿勢に変化が見られるようになった。アシダカグモは元気な時には、8本の脚を四方にぴんと伸ばし、その脚の先端の位置はほぼ円の上にのるように静座する。しかし体力が衰えてくると、第1歩脚と第2歩脚をそろえて、やや前方に伸ばし、第3歩脚と第4歩脚は広く間隔をとって、ぴんと伸ばして静座するようになる。こうなるとそれぞれの脚の先端は、円周の上ではなく、前ぼそりのいびつな円周の上にあるようになる。翌日の9月28日にクロゴキブリを1匹与えた。それを4日目の10月2日午後11時20分に捕えて食べはじめた。翌10月3日午前8時35分に食べ終えた。食事に要した時間は9時間と15分であった。食べかすは硬い塊りにしていたが、脚は全部ばらばらになって床に落ちていた。10月3日午後にクロゴキブリを1匹与えると、翌10月4日午前9時50分に捕えて食べはじめた。これは今年度になってはじめてのことである。食欲が出てきたのではないかと思い注意して観察をした。その餌はその日の午後7時44分に食べ終えて、食べかすをぱとんと落した。これに要した時間は9時間54分であった。10月5日午前7時にクロゴキブリを1匹与えると、驚いたことに、ただちにとびついて餌を食べはじめた。このことも今年度はじめてのことである。この餌を10月5日午後5時25分に食べ終えて、食べかすの塊りを落した。10時間と25分食事に時間を要した。食べ終えてすぐにクロゴキブリ1匹を与えてやったが、今回はただちに飛びつかなかった。5日目の10月10日午後8時47分になって捕えて食べはじめた。しかし食べる時間は速く、8時間と3分で食べ終えた。食べかすも硬く、クロゴキブリの体全部を咬みくだき消化されるものはみな吸いつくしていた。10月11日午後5時にクロゴキブリ1匹を与えた。それを3日目の10月14日朝7時の定刻観察を行った時には、食べ終っていた。食べかすは塊状で消化されるものは十分に消化して吸収していた。今回は私の不注意で、食事に要した時間を知ることが出来なかった。やはり食べはじめたら終るまで観察をつづけるべきであることを痛感した。10月14日午後8時にクロゴキブリを1匹与えると、5日目の10月19日午後2時30分に捕えて食べはじめた。この餌を10月19日午後11時40分に塊状の食べかすにして口から落した。食事に要した時間は9時間と10分であった。これまでだと10月中旬までに、1回や2回の脱皮現象があるのに今年度は、まだその様子がない。それでアシダカグモの脱皮は13回で完了されたのではないかと思った。10月20日朝7時にクロゴキブリを1匹与えると、6日目の10月26日午後5時45分に捕えて食べはじめた。10月27日午前0時の定刻観察時に調べると、ほとんど食べつくしてはいるが、まだくわえていたので、ひきつづき見ていると、午前1時3分に食べ終えて食べかすを口から落した。食事に要した時間は7時間と18分であった。10月27日午前7時にクロゴキブリを1匹与えると、5日目の11月1日午後4時25分に捕え食べはじめて、11月2日午前0時55分に食べ終えた。食事所要時間は8時間と30分であった。食べかすは塊状のものがわずかで、脚や翅などそのままの形で四散していた。11月2日午前7時にクロゴキブリを1匹与えると、7日目の11月9日午後12時50分に

捕えはしたが、5分ばかりくわえていたが、はなしてしまった、クロゴキブリはまだ生きていて飼育箱の天井にかけ上った。そのクロゴキブリも午後7時の定刻観察時には死んでいた。11月9日午後7時にクロゴキブリを1匹与えると、4日目の11月13日午後8時30分に捕えて食べはじめ、9時間50分かけて食べ終えた時刻は11月14日午前6時20分であった。脚や翅は残していた。

11月14日午前7時にクロゴキブリを1匹与えると、7日目の11月21日の午前7時の定刻観察時に調べると、まだ捕えていなかったが、次の正午の観察時に行って見ると、既に捕えられていた。そのクロゴキブリの状態から推測するに、食べはじめてまだ30分ぐらいしか経過していないように思えた。それをひきつづき食べていたが、午後9時7分に食べ終えた。食事に要した時間は推定で9時間と37分であって、まだ吸収できる状態の食べかすであった。今年度は11月中旬を過ぎても室温が5°Cをわることがないので、餌をつづけて与えることにしたのである。11月21日午後10時にクロゴキブリを1匹与えた。それを6日目の11月27日午後5時38分に捕えて食べはじめたが3分後に口から放してしまって飼育箱の側面に腰高の姿勢でとまり、盛んに化粧をはじめた。これは食後によくやる動作である。咬れたクロゴキブリは翌11月28日午前7時に死んでいたので、新しくクロゴキブリを1匹与えたが、クモは10日目の12月8日になんでも餌を捕えようともしなかった。それからさらに2日後の12月10日にはクロゴキブリは死んでしまった。

12月10日の正午にはクロゴキブリの幼生（成体になる直前のもの）を1匹与えてみた。この餌は翌12月11日午後5時30分に捕え食べはじめた。これを12月12日午前1時11分に食べ終えた。食事に要した時間は7時間と44分であって、食べかすも塊状にして落した。この時期になるとクロゴキブリは成体より亜成体の方が活動的であるから、これからは亜成体を与えることにした。12月13日午前7時にクロゴキブリの亜成体を1匹与えた。それを5日目の12月18日午後4時に捕えたが、20分後にはなってしまった。その時室温は6°Cであって、クモ自体も行動が緩慢になっていた。12月19日には室温が5°Cになったので、餌をやるのを止めて、発泡スチロールの板で飼育箱を包み、越冬の準備をした。定刻の観察時には包をほどきクモの様子を調べ、水入に水の欠けているときには、水を注いだ。この状態は翌年の2月28日までつづいた。2月28日の正午の観察時に調べると、飼育箱の中を動き回っているので、クロゴキブリを1匹与えてみた。しかし10日後の3月10日にクロゴキブリの方が死んでしまった。このクモはまだ食欲が出ていなかった。けれども室温が上昇してきたので、3月10日にクロゴキブリの亜成体を1匹与えると、4日目の3月14日午後9時24分に捕えて食べはじめた。それを翌3月15日午前7時45分に食べ終えた。食事に要した時間は10時間と21分であった。3月15日午後7時にクロゴキブリを1匹与えた。それを7日目の3月22日午後9時55分に、やっと捕えて食べはじめた。それを12時間と10分かけて食べ終った。その時刻は3月23日午前10時5分であった。食べかすはふわふわした塊りであった。室温の最低温度が10°Cを下らなくなつたので、発泡スチロールの板をはずし、飼育台に置いた。3月23日正午にクロゴキブリの成体を1匹与えた。それを5日目の3月28日午後10時10分に捕えて食べはじめた。その餌を11時間30分かけて食べ終えた時刻は3月29日の午前9時40分であった。食べかすはクロゴキブリの腹部だけを咬みくだいて吸収しただけで、原形はそのままであった。けれども水のみ場によくいって、しきりに水分をとっていた。3月29日正午にクロゴキブリ

の成体を1匹与えると、5日目の4月3日午後7時に観察した時には既に食べかけていたが、クロゴキブリはまだ生きていたので、食べはじめてから10分以内であると推測した。その餌を推定11時間と24分かけて食べ終えた。その時刻は4月4日午前6時14分であった食べかすは塊状で、消化されるものは十分に吸収していた。4月4日午前7時にクロゴキブリの成体を1匹与えた。この餌を3日目の4月7日午後8時15分に捕えて食べはじめた。クモは活動的になって盛んに餌を追いかけ、何べんか失敗してやっと捕えたのである。4月8日午前6時50分に食べ終えた。食事に要した時間は10時間35分であって、食べかすは硬い塊状であった。4月8日午前7時にクロゴキブリの成体を1匹与えると、6日目の4月14日午前0時5分に捕食しはじめた。今までの経験から、翌朝の7時の定刻観察時までには食べつくせぬと思い眠ることにしたのである。

幸に4月14日朝7時の観察時には食べ終っていないかった。つづけて観察していると、午前9時30分に食べ終えて、ふんわりとした塊りの食べかすを口からはなした。食事に要した時間は9時間25分であった。4月14日正午にクロゴキブリの成体を1匹与えると、4日目の4月18日午後7時42分に捕えて食べはじめた、4月19日午前0時の定刻観察時には、まだ食べつつだったので、観察を妻に変って私がつづけた。すると4月19日午前5時23分に食べ終えて、ぐさぐさに固めた食べかすを口からはなした。食事に要した時間は9時間と41分であった。4月19日午前7時にクロゴキブリの成体を1匹与えると、7日目の4月26日午後11時23分に捕食しはじめ、翌4月27日午前8時35分に食べ終った。食べかすはかなり硬い塊状にしていた。所要時間は9時間と12分であった。4月27日正午にクロゴキブリの成体を1匹与えたが、今年度最後の4月30日には、まだ捕えていなかった。

今年度(6年目)の観察において、特に注意をして調べたことは、食事にどの程度時間がかかるかを測定することであった。妻と交代で観察し、正確なデーターを出したかったが、2回ばかり測定に失敗をした。その2回は推定の時間である。さらに1回は2人共外出していて全く測定が出来なかった。今年度このクモは32匹のクロゴキブリを捕食し、その食事に要した時間はほぼ10時間余りであった。ここでわかつることは、クモも年をとると食べる量が非常に減少する事と、食べ終るのに時間がかかる事であった。食かすについても、完全に食べつくすことが出来ず、まだ食べられる状態で残すようになった。交尾は1回で、産卵は2回行ったが、脱皮はなかった。

新潟県十日町地方に伝わるジゴ（ジグモ）の 唱え歌と喧嘩民俗について

新 海 明・樋 口 厚

（国立音楽大学附属音楽高等学校）

クモを使った遊びに関しては千葉県房総半島及び神奈川県横浜地方にみられるネコハエトリを用いたフンチとパパが有名である（植村 1957. 松本 1966）。この他にもジグモやコガネグモなどを用いた遊びもよく知られている（斎藤 1974. 川名・斎藤 1982）。

筆者らのうち一人樋口は幼少時代——昭和10年（1935）前後——を新潟県中魚沼郡十日町地方で過し、その時代のジグモを用いた遊びと唱え歌を記憶にとどめていた。

クモの民俗学を研究されている斎藤慎一郎氏によると「ジグモの民俗に関してはかつて長尾勇氏（1954）が雑誌『國語学』に発表されたことがあり、日本のクモの中では民俗学方面に関する限り比較的よく調べられている方」であるが「地方別の傾向の分析、唱え歌の集成といった面を含めた総合的研究はまだ一篇もでていなく」「これまでの仕事は主に方言の収集であった」という。またクモの遊びの唱え歌（あるいは囃し言葉）はネコハエトリやカバキコマチグモなどの遊びにもみられることがある（斎藤、私信）。そこで、ここでは樋口の記憶をもとにした新潟県十日町地方に伝わるジゴ（ジグモ）の唱え歌と遊びを紹介し記録にとどめたいと思う。

樋口の郷里十日町地方は古くから絹織物の産地として知られている。当然クワ畠が多くジゴはこのクワの根元に多数生息していた。子供たちは空カンを持ってクワの木の根元にのぞくジゴの巣を手でつまんで引き抜き、この中にいるクモを多数集めた。御存知のように、この時ジゴの巣は途中で切れてしまうことがあり、その際に「ジーゴ、ジゴ、ジゴ、シタニカジガアルスケニ、テンジョーヘアガレー」と唱えてクモを探集したという（図1）。これを標準語に直すと「ジグモ、ジゴモ、ジグモ、下に火事があるから上にあがれあがれ」ということになる。この「下が火事だから上にあがれ」という意味の唱え歌そのものは全国的に分布をしており、北原白秋（1949）『日本伝承童謡集成』に多数記載されている（斎藤、私信）。それらの例を表1にまとめておく。

空カンに集めたジゴは神社などの境内に持ち寄り、空カンから外へ取り出し今度はクモ同士の喧嘩をさせて遊んだ。この遊びには特にルールがあるわけではなく地面や石の上にクモをのせてそれらをけしかけて喧嘩をさせただけであった。川名・斎藤（1983）によって述べられたようなネコハエトリのfighting display の行動等に関する呼び名のようなものは、このジゴの遊びには存在しないようだ。

ここで紹介したジゴの唱え歌と喧嘩民俗は斎藤氏によると「全国的に散在する同系の遊びにくらべて『喧嘩させる』ことと『唱え歌のユニークさ』において面白い」そうで、同氏のお薦めもあって、ここに報告した次第である。

なお、本稿をまとめにあたり斎藤慎一郎氏と新海栄一氏には文献の紹介や原稿をお読みいただき

さまざまな御指導をお願いした。ここに厚く御礼申し上げる。



図1 ジゴの唄（新潟県十日町地方）

表1 クモの遊び唄：「下が火事だから上にあがれ」という意味の唄の一覧

（資料は斎藤慎一郎氏による）

| | |
|---------------------------------|------|
| ◦ 土蜘蛛、土蜘蛛、下は火事だから上さあがれ | （茨城） |
| ◦ ちんちん蜘蛛、ちんちん蜘蛛、下に火事があるから天井へあがれ | （群馬） |
| ◦ 土蜘蛛、土蜘蛛、下に火がある上に火事がない、天井へのぼれ | （群馬） |
| ◦ 蜘蛛、蜘蛛、天上が火事だから水もってあがれ | （群馬） |
| ◦ 地蜘蛛、地蜘蛛、下に火事やあるに出て来い | （長野） |
| ◦ 地蜘蛛、地蜘蛛、下に火事やある、お茶飲みあがれ | （長野） |
| ◦ じむ、じむ出て来い、じむの家火事になる | （長野） |
| ◦ 地蜘蛛、地蜘蛛、天まであがれ、あがれ | （静岡） |
| ◦ 土蜘蛛、ねんびきじょ、地の下、火事、火事 | （福岡） |

引用文献

川名興・斎藤慎一郎. 1982. ハエトリグモの決闘. アニマ9月号: 61-66.

———. 1983. ネコハエトリの喧嘩民俗(抄). 三会合同例会講演.

* 北原白秋編. 1949. 日本伝承童謡集成, 第2巻, 天体氣象・動植物唄編. 三省堂.

松本誠治. 1966. 千葉県のフンチとババについて. Atypus, (41-42): 45-46.

* 長尾 勇. 1954. 地蜘蛛考. 國語学会編, 國語学, 第19集. 武藏野書院.

斎藤たま. 1974. 野にあそぶ. 平凡社.

植村利夫. 1957. 横浜のホンチとババに就いて. Atypus, (13): 1-2.

* 印は直接参照していない。

東京蜘蛛談話会観察会報告

1981年春～1982年冬

天覧山のクモ

嶋田順一・鈴木勝浩

本報告は東京蜘蛛談話会の季節ごとの調査の第5回目の記録である。採集地は埼玉県飯能市にある標高195mの天覧山で第2回目の採集観察地であった巾着田から南へ約3kmほどの所である。天覧山はかつて、東亜蜘蛛学会の第1回目の採集観察会が昭和11年7月5日(及び10月25日)に行なわれた場所である。

天覧山は奥武蔵の玄関口にあたり、西武池袋線飯能駅より歩いて約10分位のところにあり、山というには、低すぎる感じはするが、(飯能市内も標高100mあり天覧山との標高差は95m)山頂からの展望はすばらしく、東の方は関東平野が一面に広がり西は秩父の山々が広がっている。

今回の結果は四季別一覧表に示した通りで、1年間の記録は30科150種におよんだ。特に春と秋の記録は100種近く、未同定種を含めると100種を越えていた。冬の43種は当日雨に降られ、採集時間が少なかったことにもよる。

調査日及採集観察者

第1回：1981年5月10日

浅間茂・池田博明・加藤輝代子・熊田憲一・相良淳一・貞元己良・佐藤幸子・
嶋田順一・新海栄一・鈴木勝浩・高橋登・長島忠義・蓮沼克己・松浦裕司・
松本誠治(好子・賢)・奥隅明紀・斎藤淳一・三上千恵子(晃一)

第2回：1981年7月26日

池田博明・熊田憲一・近藤恭子・嶋田順一・鈴木勝浩・高橋登・堀越雅弘・
松浦裕司・他1名

第3回：1981年10月18日

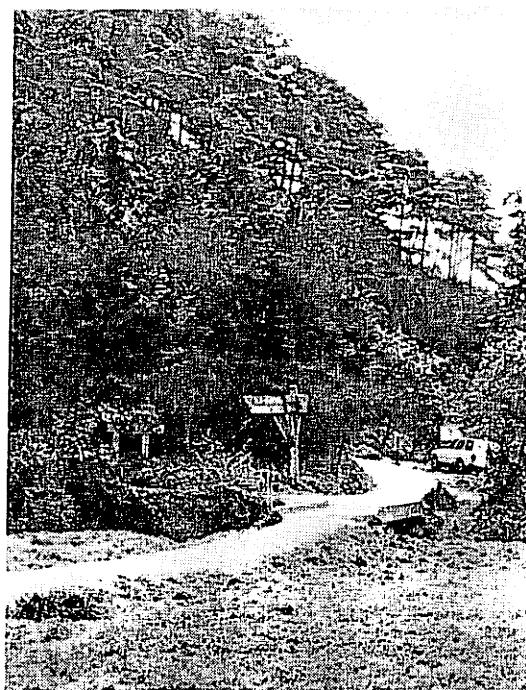
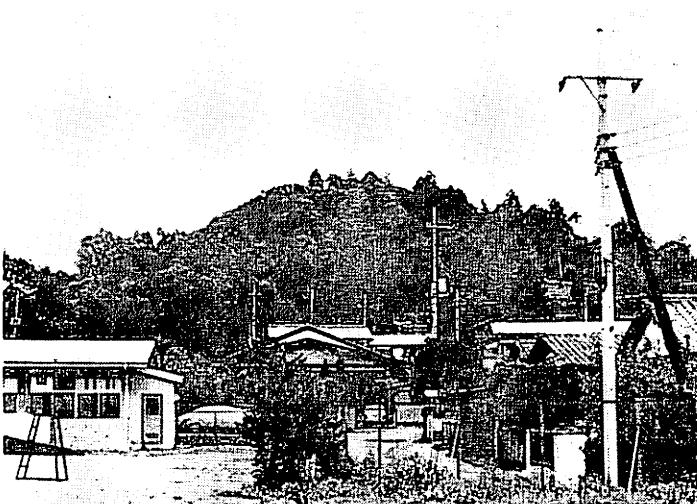
浅間茂・池田博明・熊田憲一・嶋田順一・鈴木勝浩・長島忠義・堀越雅弘・
松浦裕司・他2名

第4回：1982年2月21日

池田博明・加藤輝代子・熊田憲一・貞元己良・嶋田順一・鈴木勝浩・高橋登・
堀越雅弘・松浦裕司



1981年10月18日 山頂にて



- ↑ 天覧山の裏道
- ← 南から見た天覧山
- ← 採集場所の一部

四季別種類一覧表

一覧表に使用した齢期の記号は、Ad→(成体)、SubあるいはS→(亜成体)、y→(幼生)、e→(卵)を示している。○は幼生～成体の全てが見られたもので※は齢期不明。

| | | | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|-----|---------------------------------|-----------|-----|------|------|---|
| | I Antrodiaetidae | | | | | |
| 1. | <i>Antrodiaetus roretzi</i> | カネコトタテグモ | ○ | y | y | - |
| | II Ctenizidae | | | | | |
| 2. | <i>Umnidia fragaria</i> | キノボリトタテグモ | y | y.Ad | y | - |
| | III Atypidae | | | | | |
| 3. | <i>Atypus karschi</i> | シグモ | y | Ad | y.Ad | y |
| | IV Dictynidae | | | | | |
| 4. | <i>Lathys humilis</i> | カレハグモ | Ad | - | - | - |
| | V Uloboridae | | | | | |
| 5. | <i>Miagrammopes orientalis</i> | マネキグモ | Sy | Ad | y | y |
| 6. | <i>Uloborus sybotides</i> | カタハリウズグモ | - | Ad | - | - |
| 7. | <i>U. varians</i> | ウズグモ | S | - | y | - |
| | VI Segestriidae | | | | | |
| 8. | <i>Ariadna lateralis</i> | ミヤグモ | Ad | y | y | ○ |
| 9 | <i>Segestria komatsuana</i> | コマツエンマグモ | S | - | y | - |
| | VII Oonopidae | | | | | |
| 10. | <i>Gamasomorpha cataphracta</i> | ダニグモ | y | - | - | - |
| | VIII Pholcidae | | | | | |
| 11. | <i>Pholcus crypticolens</i> | ユウレイイグモ | SAd | Ad.e | y | y |
| | IX Theridiidae | | | | | |
| 12. | <i>Achaearanea angulithorax</i> | ツリガネヒメグモ | - | Ad | - | - |
| 13. | <i>A. lunata</i> | カグヤヒメグモ | - | Ad | Ad | - |
| 14. | <i>A. tepidiorum</i> | オオヒメグモ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 15. | <i>Anelosimus crassipes</i> | アシプトヒメグモ | SAd | y | y | - |
| 16. | <i>Ariamnes cylindrogaster</i> | オナガグモ | y | ○ | y | y |
| 17. | <i>Chrysso punctifera</i> | ホシミドリヒメグモ | Ad | - | y | - |
| 18. | <i>Argyrodes fissifronns</i> | チリイソウロウグモ | - | S | - | - |
| 19. | <i>A. fur</i> | フタオイソウログモ | - | - | ey | - |
| 20. | <i>A. saganus</i> | ヤリグモ | y | ○ | y | y |
| 21. | <i>Dipoena castrata</i> | ボカシミジングモ | - | - | - | s |
| 22. | <i>D. fravomagrinata</i> | キベリミジングモ | y.s | - | - | y |

| | | | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|-----------------------|---------------------------------------|-------------|------|------|------|----|
| 23. | <i>D. musterina</i> | カニミジングモ | — | y.Ad | Ad | — |
| 24. | <i>D. mutilata</i> | コアカクロミジングモ | s.Ad | — | — | — |
| 25. | <i>D. punctisparsa</i> | シモフリミジングモ | y | — | y | y |
| 26. | <i>Enoplognatha transversifoveata</i> | カレハヒメグモ | — | — | — | y |
| 27. | <i>Episinus affinis</i> | ヒシガタグモ | — | — | y | — |
| 28. | <i>Phoroncidia piluna</i> | ツクネグモ | ※ | — | — | — |
| 29. | <i>Stenmops nipponicus</i> | スネグロオチバヒメグモ | y | — | — | Ad |
| 30. | <i>Theridion chikunii</i> | バラギヒメグモ | s.Ad | Ad | y | y |
| 31. | <i>T. japonicus</i> | ヒメグモ | — | Ad | ○ | — |
| 32. | <i>T. latifolium</i> | ヒロハヒメグモ | Ad | — | — | — |
| 33. | <i>T. sterninotatum</i> | ムナボシヒメグモ | s.Ad | Ad | y | y |
| 34. | <i>T. subadultum</i> | コケヒメグモ | — | — | y | y |
| X Nesticidae | | | | | | |
| 35. | <i>Nesticus brevipes</i> | コホラヒメグモ | — | — | s | — |
| XI Linyphiidae | | | | | | |
| 36. | <i>Labulla contortipes</i> | アシヨレグモ | Ad | y | s.Ad | Ad |
| 37. | <i>Leptophantes clarus</i> | ハガタヤセグモ | Ad | — | — | — |
| 38. | <i>Linyphia oidedicata</i> | ヘリジロサラグモ | y | y | y | Ad |
| 39. | <i>Neolinyphia japonica</i> | ツリサラグモ | y | — | — | — |
| 40. | <i>Prolinyphia limbatinella</i> | フタスジサラグモ | — | — | Ad | — |
| 41. | <i>P. longipedella</i> | アシナガサラグモ | — | y.Ad | Ad | — |
| 42. | <i>P. yunohamensis</i> | ユノハマサラグモ | s.Ad | — | y | y |
| 43. | <i>Porrhomma tateyamaense</i> | タテヤマサラグモ | — | Ad | — | — |
| XII Erigonidae | | | | | | |
| 44. | <i>Asperthorax communis</i> | ザラアカムネグモ | — | — | — | Ad |
| 45. | <i>Micrargus latitegulatus</i> | ヒロテゴマグモ | Ad | — | — | — |
| 46. | <i>Nematomus sanguinolentus</i> | チビアカサラグモ | Ad | — | — | — |
| XIII Mimetidae | | | | | | |
| 47. | <i>Ero japonica</i> | センショウグモ | y.Ad | Ad.e | y | Ad |
| XIV Symphytognathidae | | | | | | |
| 48. | <i>Mysmena jobi</i> | ナンブコツブグモ | s.Ad | Ad | y | — |
| XV Araneidac | | | | | | |
| 49. | <i>Acusilas coccineucus</i> | ハツリグモ | s.Ad | ○ | y | — |
| 50. | <i>Araneus ishisawai</i> | イシサワオニグモ | — | — | Ad | — |
| 51. | <i>A. macacus</i> | ヤエンオニグモ | — | — | y | — |

| | | | 春 | 夏 | 秋 | 冬 | |
|-----|----------------------------------|------------------------|---------------|-----|------|----|---|
| 52. | <i>A.</i> | <i>ventricosus</i> | オニグモ | s | — | y | — |
| 53. | <i>A.</i> | <i>abscissus</i> | キザハシオニグモ | Ad | — | y | — |
| 54. | <i>A.</i> | <i>tsuno</i> | ツノオニグモ | — | — | y | y |
| 55. | <i>A.</i> | <i>pseudocentrodes</i> | トガリオニグモ | y | — | — | — |
| 56. | <i>A.</i> | <i>cucurbitinus</i> | ハナオニグモ | — | — | s | — |
| 57. | <i>A.</i> | <i>ejusmodi</i> | ヌサオニグモ | — | — | y | — |
| 58. | <i>A.</i> | <i>mitificus</i> | ビジョオニグモ | s | — | — | — |
| 59. | <i>A.</i> | <i>pentagrammicus</i> | アオオニグモ | Ad | — | y | — |
| 60. | <i>A.</i> | <i>semilunaris</i> | マルズメオニグモ | s | — | y | — |
| 61. | <i>Neoscona doenitzi</i> | | ドヨウオニグモ | — | — | Ad | — |
| 62. | <i>N.</i> | <i>fuscocolorata</i> | ヤミイロオニグモ | Ad | Ad | y | — |
| 63. | <i>N.</i> | <i>mellotteei</i> | ワキグロサツマノミダマシy | s | Ad | — | — |
| 64. | <i>N.</i> | <i>scylla</i> | ヤマシロオニグモ | y | Ad | — | — |
| 65. | <i>N.</i> | <i>scyloides</i> | サツマノミダマシ | — | s | — | — |
| 66. | <i>Yaginumia sia</i> | | ズグロオニグモ | — | — | y | — |
| 67. | <i>Hypsosinga sanguinea</i> | | シロスジショウジョウグモy | — | y | — | — |
| 68. | <i>Zilla astridae</i> | | サガオニグモ | Ad | — | y | y |
| 69. | <i>Z.</i> | <i>sachalinensis</i> | カラフトオニグモ | — | y.s | y | — |
| 70. | <i>Argiope aetherea</i> | | チユウガタコガネグモ | y | Ad | — | y |
| 71. | <i>A.</i> | <i>amoena</i> | コガネグモ | — | ○ | Ad | — |
| 72. | <i>A.</i> | <i>bruennichii</i> | ナガコガネグモ | — | y | Ad | — |
| 73. | <i>A.</i> | <i>minuta</i> | コガタコガネグモ | y | y | Ad | — |
| 74. | <i>Chorizopes nipponicus</i> | | ヤマトカナエグモ | — | — | e | — |
| 75. | <i>Cyclosa argenteoalba</i> | | ギンメッキゴミグモ | y | Ad | y | — |
| 76. | <i>C.</i> | <i>laticauda</i> | キジロゴミグモ | y.s | — | — | — |
| 77. | <i>C.</i> | <i>octotuberculata</i> | ゴミグモ | y | Ad.e | y | ○ |
| 78. | <i>C.</i> | <i>sedeculata</i> | ヨツデゴミグモ | y | ○ | ○ | — |
| 79. | <i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> | | シロオビトリノフンドマシー | y | — | — | — |
| 80. | <i>Meta yunohamensis</i> | | メガネドヨウグモ | Ad | — | y | y |
| 81. | <i>Nephia clavata</i> | | ジヨロウグモ | e.y | y | Ad | — |

XVI Theridiosomatidae

| | | | | | | |
|-----|------------------------|-------|-----|-----|-----|---|
| 82. | <i>Ogulnius pullus</i> | ヤマシグモ | y.s | y.e | y.e | — |
|-----|------------------------|-------|-----|-----|-----|---|

XVII Thetragnatidae

| | | | | | | |
|-----|---------------------------------------|--------------|---|---|----|---|
| 83. | <i>Dyschiriognatha quadrimaculata</i> | ヨツボシヒメアシナガグモ | — | — | Ad | — |
| 84. | <i>Leucauge magnifica</i> | オオシロカネグモ | y | ○ | — | — |

| | | | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|------------------|--------------------------------|------------|------|------|------|----|
| 85. | <i>L.</i> <i>subblanda</i> | コシロカネグモ | — | ※ | — | — |
| 86. | <i>L.</i> <i>subgemmea</i> | キララシロカネグモ | — | ○ | — | — |
| 87. | <i>Tetragnatha pinicola</i> | ミドリアシナガグモ | — | y | — | — |
| 88. | <i>T.</i> <i>praedonia</i> | アシナガグモ | y.s | — | Ad | — |
| 89. | <i>T.</i> <i>squamata</i> | ウロコアシナガグモ | Ad | Ad | y | y |
| XVIII Urocteidae | | | | | | |
| 90. | <i>Uroctea compactilis</i> | ヒラタグモ | s.Ad | y | y | y |
| XX Agelenidae | | | | | | |
| 91. | <i>Agelena limbata</i> | クサグモ | y | Ad | Ad.e | ○ |
| 92. | <i>A.</i> <i>opulenta</i> | コクサグモ | y | y | Ad | — |
| 93. | <i>Coelotes exitialis</i> | ヤチグモ | Ad | ※ | y | — |
| 94. | <i>C.</i> <i>insdiosus</i> | シモフリヤチグモ | — | — | Ad | — |
| 95. | <i>C.</i> <i>modestus</i> | ヤマヤチグモ | y | — | Ad | — |
| XX Hahniidae | | | | | | |
| 96. | <i>Hahnia corticicola</i> | ハタケグモ | s | — | — | — |
| XXI Pisauridae | | | | | | |
| 97. | <i>Dolomedes hercules</i> | スジブトハシリグモ | — | — | y | — |
| 98. | <i>D.</i> <i>vaptor</i> | アオグロハシリグモ | y | — | — | — |
| 99. | <i>D.</i> <i>saganus</i> | スジアカハシリグモ | — | y | — | y |
| 100. | <i>D.</i> <i>sulfureus</i> | イオウイロハシリグモ | y.s | ○ | s | y |
| 101. | <i>Pisauva lama</i> | アズマキシダグモ | Ad | Ad.e | y | y |
| XXII Lycosidae | | | | | | |
| 102. | <i>Pardosa astrigera</i> | ウヅキコモリグモ | Ad | — | Ad | Ad |
| 103. | <i>P.</i> <i>cineveofusca</i> | セアオコモリグモ | ※ | — | — | — |
| 104. | <i>P.</i> <i>Laura</i> | ハリゲコモリグモ | s.Ad | Ad.e | y | — |
| 105. | <i>Pirata procurvus</i> | チビコモリグモ | — | Ad.e | — | — |
| 106. | <i>Trochosa terricola</i> | カラフトコモリグモ | — | — | Ad | — |
| XXIII Oxyopidae | | | | | | |
| 107. | <i>Oxyopes badius</i> | クリチャササグモ | s | — | — | — |
| 108. | <i>O.</i> <i>sertatus</i> | ササグモ | — | Ad.e | y | — |
| 109. | <i>O.</i> <i>koreanus</i> | コウライササグモ | — | Ad | — | — |
| XXIV Thomisidae | | | | | | |
| 110. | <i>Coriarachne fulvipes</i> | コカニグモ | — | — | — | Ad |
| 111. | <i>Misumenops japonicus</i> | コハナグモ | — | Ad.e | y | — |
| 112. | <i>M.</i> <i>tricuspidatus</i> | ハナグモ | y.s | Ad.e | y | — |

| | | | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|------|--------------------------------|------------|------|----|------|---|
| 113. | <i>Oxyptila decorata</i> | キハダカニグモ | Ad | y | s | s |
| 114. | <i>Oxytate striatipes</i> | ワカバグモ | Ad | y | s | - |
| 115. | <i>Philodromus spinitarsis</i> | キハダエビグモ | Ad | s | y | y |
| 116. | <i>P. subaureolus</i> | アサヒエビグモ | s.Ad | ○ | y | - |
| 117. | <i>Synaema takashimai</i> | アマギエビスグモ | - | - | - | y |
| 118. | <i>Thomisus labefactus</i> | アズチグモ | y | y | Ad.e | - |
| 119. | <i>Tibellus tenellus</i> | シャコグモ | y | ○ | y | - |
| 120. | <i>Tmarus piger</i> | トラフカニグモ | Ad | Ad | - | - |
| 121. | <i>T. rimosus</i> | セマルトラフカニグモ | - | - | Ad.e | y |
| 122. | <i>Xysticus croceus</i> | ヤミイロカニグモ | ○ | Ad | s | - |

XXV Salticidae

| | | | | | | |
|------|---------------------------------|-------------|----|----|------|----|
| 123. | <i>Boethus sexdentatus</i> | ムツバハエトリ | s | - | - | - |
| 124. | <i>Carrhotus xanthogramma</i> | ネコハエトリ | Ad | - | Ad | - |
| 125. | <i>Dendryphantes atratus</i> | カラスハエトリ | - | s | - | - |
| 126. | <i>Euophrys undulatovittata</i> | イナズマハエトリ | - | - | y | - |
| 127. | <i>Evarcha albaria</i> | マミジロハエトリ | y | y | Ad | - |
| 128. | <i>Hasarius doenitzi</i> | デニッツハエトリ | Ad | - | y.Ad | - |
| 129. | <i>Icius linea</i> | メガネアサヒハエトリ | - | s | - | - |
| 130. | <i>Jotus abnormis</i> | チャイロアサヒハエトリ | - | - | Ad | - |
| 131. | <i>Marpissa elongata</i> | ヤハズハエトリ | - | ※ | - | - |
| 132. | <i>M. magister</i> | オスクロハエトリ | - | - | Ad | - |
| 133. | <i>M. pulla</i> | ヨダンハエトリ | Ad | - | - | - |
| 134. | <i>Myrmarachne japonica</i> | アリグモ | Ad | Ad | Ad | - |
| 135. | <i>Pellenes ususudi</i> | ウススジハエトリ | s | - | y | - |
| 136. | <i>Plexippus annulipedis</i> | マダラスジハエトリ | s | - | - | Ad |
| 137. | <i>Silerella vittata</i> | アオオビハエトリ | - | Ad | y | - |

XXVI Clubionidae

| | | | | | | |
|------|--------------------------------|-----------|------|----|---|----|
| 138. | <i>Chiracanthium japonicum</i> | カバキコマチグモ | - | Ad | - | - |
| 139. | <i>Clubiona jucunda</i> | ヤハズフクログモ | | | | |
| 140. | <i>C. lena</i> | トビイロフクログモ | Ad | - | - | - |
| 141. | <i>C. vigil</i> | ムナアカフクログモ | - | - | y | Ad |
| 142. | <i>Itatsina praticola</i> | イタチグモ | s.Ad | - | - | - |
| 143. | <i>Phrurolithus nipponicus</i> | ウラシマグモ | s.Ad | - | y | - |
| 144. | <i>P. pennatus</i> | ヤバネウラシマグモ | - | Ad | - | - |
| 145. | <i>Trachelas japonicus</i> | ネコグモ | - | - | y | Ad |

| | | | 春 | 夏 | 秋 | 冬 |
|----------------------------------|---------|----|----|----|-------|---|
| XXVII Anyphaenidae | | | | | | |
| 146. <i>Anyphaena pugil</i> | イヅツグモ | s | — | — | s. Ad | |
| XXVIII Heteropodidae | | | | | | |
| 147. <i>Heteropoda forcipata</i> | コアシダカグモ | Ad | — | — | y | |
| XXIX Ctenidae | | | | | | |
| 148. <i>Anahita fauna</i> | シボグモ | y | y | y | — | |
| XXX Gnaphosidae | | | | | | |
| 149. <i>Drassodes striatus</i> | トラフワシグモ | Ad | — | — | — | |
| 150. <i>Gnaphosa kompirensis</i> | メキリグモ | — | y | — | — | |
| 合 計 | | 93 | 76 | 97 | 43 | |

東京蜘蛛談話会

昭和58年度例会・総会での講演内容

談話会の昭和58年度の例会および総会が昭和58年4月17日(日)に大橋区民会館にて行なわれた。

出席者：井上房枝・小池牧子・熊田憲一・嶋田順一・斎藤 博・蓮沼克己・近藤恭子・林 俊夫・高橋 登・池田博明・佐藤幸子・日下部光代・松本誠治・小沢実樹・梅林 力・斎藤慎一郎・浅間 茂・古浜 隆・松浦裕司・加藤輝代子・山本一博・(以上談話会員)
清水高男・竹内桂子・大味 聰・藤田 勝(東邦大生)

プログラム

- 午前：講演発表(加藤・池田・高橋・斎藤)
午後：総会(議長選出・会計報告・委員の改選・編集)
講演発表(井上・佐藤)
自己紹介

講演発表の内容を次下に示した。

1. トリノフンダマン類の越冬の観察(加藤輝代子)

昭和58年2月、伊豆にての観察報告。ススキの葉の中や根の団りには見つけることができなかったが、ミカンの葉の裏に、夏の状態と同様についていた。何頭かを持ち帰り飼育中。

2. ムラクモヒシガタグモの生態(池田博明)

1982年夏からの神奈川県真鶴半島での観察報告。ムラクモヒシガタグモの交尾習性・卵のうの制作・共生、ヒシガタグモのY字型網・卵のうなどについて、スライドを用いて説明。

3. 最近撮れた秘蔵の写真(高橋 登)

ワスレナグモの住居および♀の成体の写真。冬期の住居の特徴を写真を写す。次に、クモを食べるクモとして、オナガグモ・ヤリグモの写真、オナガグモがハナグモを食べているところ、特にもしろい写真として、ヤリグモがオナガグモを食べているものであった。また、ハナグモがトリノフンダマンを食べることもある。

4. ネコハエトリの民俗と習性(斎藤慎一郎)

房総半島と横浜及び三浦半島の一部で古くから行われていたネコハエトリの喧嘩遊びを民俗調査

したところ、この遊びのルーツがほぼ明らかになったばかりでなく、ネコハエトリの習性と生活史解明の上でも数々の手がかりが得られた。

- ① ネコハエトリの喧嘩遊びは、全国（特に西日本）の海岸（漁港）地方に連続的に分布するコガネグモ糸のクモ合戦の関東における変異型であり、その起源は房総半島であったと信じられる。（方言名の多様さ、ネコハエトリの生長段階による多彩な命名、遊びの盛行性、他地方への伝播を示唆する言い伝え等、複数の根拠による。）
- 横浜の「ホンチ」は木更津・君津等の「ホント・ホンチ・ホンギ・フンチ」等と共に通しており、横浜一同が専ら「ホンチ」という單一名であるのは、対岸からこの遊びが渡来してきたことを有力に暗示している。
- ② 三浦半島には三崎、長井（荒崎付近）などにネコハエトリ遊びがあったが、三浦のクモ合戦は房総（専らネコハエトリ遊び）と異なり、コガネグモ、カバキコマチグモ、ジグモ、ネコハエトリの各習俗がモザイク状に分布している点で他地方と様相を異にしている。
- ③ ネコハエトリの生活史の問題点への民俗伝承からのヒント
- ④ ④先熟----房総・横浜でネコハエトリ成体♀をそれぞれタネババ、ナツババと呼び、子供達は其成熟をよく知悉していた。実際に♀は④より約2週間遅れて成熟する。
 - ⑤ 越 冬----房総・横浜・三浦の伝承にこのクモの地上越冬（落ち葉の間）及び樹上越冬（越冬单の中）というものがあったが、子供達の観察は事実をよく見ぬいており、落葉樹に棲むネコハエトリは地上越冬して冬の間に何度も棲み替えをし、常緑樹のネコハエトリは単一の越冬巢で一冬を過ごす。

5. ホシミドリヒメグモの越冬について（井上房枝・加藤輝代子）

ホシミドリヒメグモは春型種で、年一化性であり、亜成体で越冬する種である。本種を採集した後、野外保存を行ない、 $20\text{・}15^{\circ}\text{C}$ 14時間照明に移管し、脱皮までの日数を調査した。その結果、冬の初めから冬期に高温区に入れたものは脱皮までの日数が非常に長く、2月および3月に入れたものは $15\text{・}20^{\circ}\text{C}$ ともに8月と同様であった。以上のことから本種は寒さにあうことにより、春になるとすぐに脱皮をし成体になると考えられる。

6. サラグモ・コサラグモの2齢幼体の捕食に関して（佐藤幸子）

スソグロサラグモの室内飼育を続けているうちに、その2齢幼体が離のうしてから捕食するまでの日数に興味を持った。それで観察した結果（1982年4月～1983年4月）をとりあえず報告する。

表紙に寄せて

小沢実樹

東京都区分地図を拡ろげて、表紙の図と見比べてみると、太線は鉄道路線であることはすぐ解る。だが、細いシマシマの線は見当らない。まして「●印」が駅名でないことは明らかだ。でも、会員各位には、それが蜘蛛に関係したものであることを即刻認識していただけたと思う。いわばこの地図は、人間社会と、蜘蛛社会の混合マップである。

ところで、人間社会では、昨年「情報通信学会が誕生した。世界コミュニケーション年にふさわしいニュースであった。鉄道や、電話は開通して100年を過ぎた。テレビは、ずいぶん昔から視ているようだが、まだ25才の青年である。グーテンベルグの活版術発明からすでに530年を過ぎ、我々人間社会は、いろんな道具を使っておつき合いをしている。つい先日、放送衛星が地球を飛び出し、情報通信機器の耳なれぬ用語が、あちこちで聞かれる昨今である。ところで、そんな高度な、情報化社会を論ずるつもりはなかったが、そんなネットワークシステムを知ると、情報システムの原点は何か。あらためて自問してみたくもなる。

一方、蜘蛛たちも、有線・無線を駆使して生息している。しかも人間有史以前からのことであろう。光や風、植物や気象など、さまざまな自然の条件を、巧みに利用して、情報を得、生活している。獲物との関係を無理なく、身らの生活条件にとり入れている。情報をキャッチする術は、大げさな人間社会の構造に比べ、実にシンプルで無駄がない。オナガグモや、マネキグモなどほとんど労なくして情報キャッチのネットワークを創るように見える。オオギグモのその様子も実に考えたものだ。ムラクモヒシガタグモの造網は、人間の智恵を越える幾何文様にまで昇華させ、しかも、完璧に近いキャッティングネットである。いわゆる円網をつくる、オニグモ、コガネグモ、トリノフンダマシ、ジョロウグモなどに至っては、横糸の粘り具合まで、それぞれに超大型コンピューターで算出したと思うほど、糸の間隔と粘りの度合が計算されている。ギンメッキゴミグモは、情報を発信しながら、相手をキャッチするかのように見える網の様子である。その他、網を張らない蜘蛛たちを含めて、数を上げればキリがない。表紙の図には、そんな思いで20種ほどの蜘蛛の網をスケッチしてみた。

都市交通路線図と、蜘蛛の網を単純に合成したものに、ヘタな理屈をつけるつもりはない。でも、タテ系の太すぎる都市構造地図と横糸のバランスを考慮した、蜘蛛の網構造図を見比べて、情報ネットワークについてそれぞれの社会構造の妙に象徴的な意味を感じるのだ。そこで思う。この、蜘蛛と人間社会の、いわば情報混合マップを見ながら、「蜘蛛と人間の共存」についてである。それは、何んだろうか。いつの日か、素晴らしい答が出る時が必ず来るだろう。東京蜘蛛談話会の会員各位が、「和して同ぜず」この会の創立の初心をもって、嬉しい喧嘩を一層重ねたいものである。蜘蛛と人間の集団、それが Study Group としてのこの会の意味であり、蜘蛛学発展の一助になることを確信している。僭越と思いながらも、つい蜘蛛の声になったつもりで筆にしてしまった。

(1984年3月記)

KISHIDAI A 投稿規定

1. 投稿資格は本会会員とする。ただし、共著者には会員以外の者を含むことができる。依頼原稿については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
2. 原稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会に関する解説、記録、記行文、感想などとし、投稿原稿に対して加筆、削除、修正などをお願いすることがある。動物分類命名規約に呈色することは除く。
3. 頁数は図表を含めて刷上り 6 頁以内とし、超過分は著者全額負担となる。（現状、1 頁につき 2,000 円とするが、印刷費の変更等により、金額がかわることがある）
4. 図、写真は原寸大を原則とし、拡大、縮少のある場合は、全額著者負担とする。
5. 別刷は原稿の 1 頁目の上部に、別刷の必要枚数および表紙の有無を赤字で記入する。（別刷の金額は、全額著者負担とする）

原稿作成上の注意

1. 原稿用紙は、44字×18行か44字×36行の横書き用紙をできるだけ使用して下さい。
(事務局にて44字×18行の原稿用紙が用意しております。尚、KISHIDAI Aは、44字×35行で1頁となります。)
2. 学名などイタリック体を使用する場合には、その下に赤線を引いて下さい。（学名の場合、属名と種名、それぞれに赤線を引いて下さい。）
3. 写真は白黒にして下さい。図は製図用インクなどにて、墨入れして下さい。
4. 文章は（44字原稿用紙使用）5行目からかきはじめて、1行目にはタイトルと3行目に著者名をかき入れて下さい。

編集後記

本号より KISHIDAI A の表紙がかわりました。お忙がしい体をこの表紙の製作のために、時間をさいてくださった小澤さんに心からお礼申しあげます。

さて、談話会もすでに 15 年が過ぎ、現在、大きな転換期をむかえています。そのひとつに、若い学生会員の入会が少なく、会員の平均年齢が高くなってきて実際に活動できる人が少ないことがあります。皆さん頑張りましょう。

KISHIDAI A №51 1984年3月30日印刷 編集者 鳩田順一

1984年3月31日発行 発行者 萱嶋 泉

発行所 東京蜘蛛談話会

〒191 東京都日野市多摩平7-15-9 萱嶋 泉方

印刷所 イチカワ印刷所

〒357 埼玉県飯能市新町 24-7